

【卒業生の声】

タンタワン奨学金が拓いた未来—支援を受ける側から支える側へ—

1. 困難のなかで閉ざしかけた就学の道

私は山岳少数民族の出身です。今はパヤオセンターでソーシャルワーカーとして働いています。

出身の村は町の学校から遠い所にありました。家から学校まで10キロほど離れており、道の状態が悪く、片道2時間かかりました。村から学校に通うのは大変だったので、町にいる親戚の家から通っていました。

親戚の家では子どもたちのお世話や家事のお手伝いをしていました。親戚は私だけに雑用をさせ、それが嫌だったので両親に頼んで祖父母の家に行き、別の学校に通うようになりました。祖父母の家に行ってから、最初はよかったです。が、食事、学費等たくさんの費用がかかり、両親は払える状況ではなくなったため、勉強をあきらめざるを得ませんでした。

何度か転校をしている中で村に帰った時、パヤオセンターのスタッフと出会いました。パヤオセンターのスタッフは村の調査と、パヤオセンターにいる子どもの家庭訪問のために村を訪れていました。その時の出会いがきっかけとなり、私は中学2年生から高校3年生までパヤオセンターで過ごすことになりました。

パヤオセンターは子どもの施設なので共同生活をするうえでの様々なルールはありますが、家族のような場所でした。

2. タンタワン奨学金との出会いと大学進学

高校3年生になり卒業を控えもっと勉強したいと思い、親に相談をしましたが進学するためのお金がないと言われました。パヤオセンターのスタッフに相談したところ、タンタワン奨学金を紹介され、大学に進学することができました。

子どもの頃は会社に勤めて会社員として働きたいと思っていたので、社会のために働くことは想像していませんでした。大学に進学して視野が広がり、何のために働くのかを考え、働く選択肢が広がりました。大学2年生の時、友だちと農村に行き、子どもたちのためのボランティア活動に参加する機会があり、子どもたちのために働くことに意義を感じました。

その時、自分自身を振り返りYMCAやタンタワン奨学金に助けられたことを思い出し、自分も誰かの役にたちたいと思うようになりました。

3. パヤオセンターのスタッフとして

大学での経験を通して、社会のために働くということを実体的に考えるようになり、どんな仕事があるのかを考えました。情報を収集する中で、パヤオセンターのことが忘れられなく、『パヤオセンターで働きたい』と思い応募をしました。なぜならパヤオセンターは子どもたち一人ひとりを支える働きをしているということ、私自身が身をもって知っているからです。その働きを通して社会に貢献するという自分の想いを実現できるのではないかと考えています。

大学ではソーシャルワーカーとしての専門的な知識を学んでこなかったため、想いだけで応募をしたので、もしかしたら受からないと思っていました。無事にパヤオセンターへの採用が決まった時は、これで後輩や社会のために働けるととても嬉しかったです。

タンタワン奨学金のおかげで学びを継続することができました。学び続けることで視野が広がり、仕事の選択肢が広がりました。大学で学ぶ機会が与えられたこと、学び続ける機会を得たのは私にとってとても大きかったです。パヤオセンターで働くことで社会の役に立つ働きがしたい、私のようにパヤオセンターで育った子どもたちセンターに戻ってスタッフになるというロールモデルになりたいと思っています。

4. 支援者の皆さまへの感謝

子どもたちを代表して、パヤオセンター、横浜 YMCA、募金活動に関わってくださっているみなさま、自分のような境遇のタイの子どもたちのために募金をしてくれる優しい心を持った方たちに感謝を申し上げます。心優しい方たちが支援してくださっていることに本当に感謝しています。

皆さまの支援が、私たちに未来を切り開く力を与えてくれています。